

## 病害虫発生予察情報予報第 2 号


佐賀県農業技術防除センター

6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。

農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。





1. 農薬の使用前には、ラベルの内容を確認しましょう。
2. 農薬は、ほ場面積等に応じた必要量を調整し、残りが出ないようにしてください。万一、残った場合でも、水系に廃棄してはいけません。
3. 住宅地等の周辺ほ場において、農薬を散布する場合は農薬が飛散しないよう注意しましょう。


### I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 <sup>注1)</sup>	6月の予想発生量 <sup>注2)</sup>		病害虫防除のてびきの記載頁 <sup>注3)</sup>	予報対象の病害虫(抜粋)
		平年比	前年比		
水稻(早期)	葉いもち	やや多	多	126～135 137～142	
	イネミズゾウムシ	やや多	並	170-171	
<b>1. イネクロカメムシ</b> 本年は、越冬成虫の発生が早い。被害を防止するため、発生がみられる場合には薬剤防除を行う。					
水稻(早植え)	葉いもち	並	並	126～135 137～142	 いもち病
	イネミズゾウムシ	並	やや多	170-171	
水稻(普通期)	葉いもち	やや多	やや多	126～135 137～142	
	スクミリングガイ	やや少	やや少	162～168	
<b>1. トビイロウンカ</b> 被害を防止するために、育苗箱施薬剤は、本虫に効果の高い薬剤(チェス、デジタルパウアー等)を使用する。その際、薬剤の効果を確認するため、基準量をむらなく処理する。特に、「さがびより」や「ヒヨクモチ」では防除を徹底する。 <b>2. いもち病</b> 苗でいもち病を確認した場合には、早急に取り除くとともに薬剤防除を行う。発生が多い地域では、長期残効型の育苗箱施薬剤を必ず使用する。 <b>3. もみ枯細菌病・白葉枯病</b> もみ枯細菌病が育苗箱で発生した場合や白葉枯病の常発圃場では、これらの病害に登録のある育苗箱施薬剤を必ず処理する。 <b>4. スクミリングガイ</b> 今年の発生はやや少ない予想であるが、常発圃場では浅水管理をしようえで薬剤防除を行う。					
水稻全般	縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	やや少	やや少	158～159	

作物名	病虫害名 <sup>注1)</sup>	6月の予想発生量 <sup>注2)</sup>		病虫害防除のてびきの記載頁 <sup>注3)</sup>	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	並	並	214~215	 イチゴ うどんこ病
	うどんこ病	やや多	やや多	204~206	
	苗立枯症 (炭疽・疫病)	やや多	やや多	208~212	
	アブラムシ類	並	並	219~220	
	<b>1. ハダニ類</b> 本圃での発生を抑えるには、育苗期の防除が重要である。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達が少ないとされる気門封鎖系薬剤を活用する。 <b>2. 炭疽病、疫病、萎黄病</b> 炭疽病については、親株からの定期的な薬剤防除を徹底する。立枯性病害（炭疽病、疫病、萎黄病）については、ビニル雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用して、水はねによる菌の飛散を防ぐ。また、これらの発病株の発生を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。				
アスパラガス	茎枯病	やや多	やや多	318~319	 茎枯病
	褐斑病	やや多	やや多	319~320	
	斑点病	やや多	やや多	319	
	アザミウマ類	やや多	並	322	
	ハダニ類	やや少	並	322~323	
	<b>1. 茎枯病、褐斑病、斑点病</b> 晴天日には施設開口部を開放し通風を図る。各病害とも3週間間隔を目安とし発生前から薬剤防除を実施する（前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮）。特に、茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし雨の降り込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。 <b>2. アザミウマ類</b> 若茎及び親茎への本虫による被害を防ぐため、虫見板（約20×30cm）への払い落とし（擬葉部を2~3回叩く）により調査し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。 <b>3. ハダニ類</b> 多発生すると防除が困難となるので、発生初期での防除を徹底する。アザミウマ類と同様に虫見板に払落としを行い、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。				
施設果菜類	<b>1. アザミウマ類、コナジラミ類</b> 施設内に残ったアザミウマ類やコナジラミ類の野外への拡散を防ぐため、栽培終了時に施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行い、これらの害虫を死滅させる。				

作物名	病虫害名 <sup>注1)</sup>	6月の予想発生量 <sup>注2)</sup>		病虫害防除のてびきの記載頁 <sup>注3)</sup>	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	多	多	240~243	
	<b>1. 果樹カメムシ類</b> 県内各地に設置した予察灯及びフェロモントラップにおいて誘殺虫数が増加している。飛来状況は地域や園地によって異なるため、園内外をこまめに見回り、早期発見、早期防除に努める（平成30年（2018年）5月24日付け病虫害対策資料第2号参照）。				

作物名	病虫害名 <sup>注1)</sup>	6月の予想発生量 <sup>注2)</sup>		病害虫防除のてびきの記載頁 <sup>注3)</sup>	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	やや多	やや多	210~212	 灰色かび病
	かいよう病	並	並	214~216	
	黒点病	やや多	やや多	212~214	
	灰色かび病	多	多	216~217	
	ミカンハダニ	やや少	少	234~238	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	少	230~234	
<b>1. 灰色かび病</b> 本年は着花数が多く、本病が発生しやすい条件である。傷果防止のため一次落果期（6月1半旬頃）に薬剤防除を行う。					
<b>2. ミカンハダニ</b> 殺ダニ剤に対する抵抗性発達を避けるため、4月~6月下旬はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、落葉、落果を助長する恐れがあるので、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤散布で対応する。					
<b>3. ミカンサビダニ</b> 6月上中旬頃が重要な防除時期であるため、薬剤防除を徹底する。					
ナシ	黒星病	やや多	多	278~281	 ナシ黒星病
	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多	292~295	
<b>1. 黒星病</b> 5月~6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用するが、既に発生している場合や長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。また、6月下旬~7月上旬は主要な伝染期となるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。					
<b>2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布</b> 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。					
ブドウ	黒とう病	やや多	やや多	325~327	 ブドウべと病
	べと病	多	多	328~330	
	褐斑病	やや多	やや多	330~331	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	少	337~338	
<b>1. べと病</b> 降雨により感染が進展するため、降雨前に薬剤散布を行う。					
<b>2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布</b> 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。					
<b>3. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止</b> 小豆大の時期までの防除を徹底する。袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。					
キウイフルーツ	<b>1. かいよう病</b> 5月以降本病の発生が増加した園がみられる。葉の斑点症状（右写真参照）の早期発見に努め、発見した場合は直ちに罹病部位を切除する。また、6月までは感染防止のため <u>すべての園において</u> 、銅水和剤及び抗生物質剤を主体とした <u>定期的な薬剤防除を実施</u> する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすいため、薬剤防除を徹底する。				 葉の斑点症状

作物名	病虫害名 <sup>注1)</sup>	6月の予想発生量 <sup>注2)</sup>		病虫害防除のてびきの記載頁 <sup>注3)</sup>	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	並	並	407~408	 炭疽病
	クワシロカイガラムシ	やや少	少	414~415	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	413~414	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	並	412~413	
	チャノコカクモンハマキ	やや多	やや多	411~412	
	チャノホソガ	並	やや多	410	
	炭疽病	やや多	並	402~403	
<p>1. <b>カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマ</b> 一部圃場で発生が多い。園内の発生状況の把握に努め、発生を認めた場合は農薬の使用基準に注意して防除を行う。</p> <p>2. <b>ナガチャコガネ</b> 二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬~6月中旬頃）が、羽化期~成虫発生初期にあたり防除適期であるため、発生圃場では薬剤防除を実施する。</p>					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

## II. 予報の内容・根拠等について

### 予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。  
 なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

### 予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。  
 ○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

### 防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

### 写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。  
 6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

### 6 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 6 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（平成 30 年 5 月 25 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

#### 気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 6 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (23.3℃)	40	<b>並</b>
降水量	20	40 (339 mm)	40	<b>やや多い</b>



### Ⅲ. 6月の予報

## 水稲（早期、上場地域）

定期調査：12 圃場  
調査日：5月23日



定期調査圃場の様子

### 1. いもち病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので活着後に速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

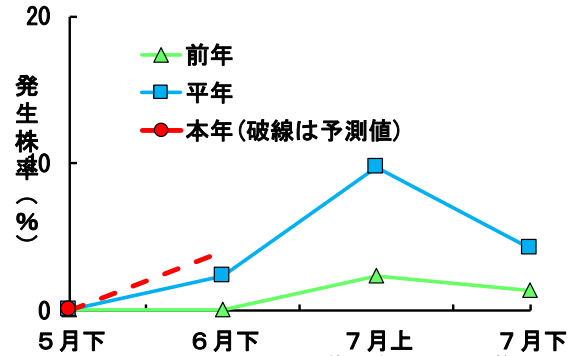


図1 早期水稲での葉いもちの発生推移

### 2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

食害株率：45.0%（平年29.3%、前年36.0%） 平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報 並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

## 水稲（山間早植え）

定期調査：15 圃場  
調査日：5月23日



定期調査圃場の様子

### 1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率 0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。

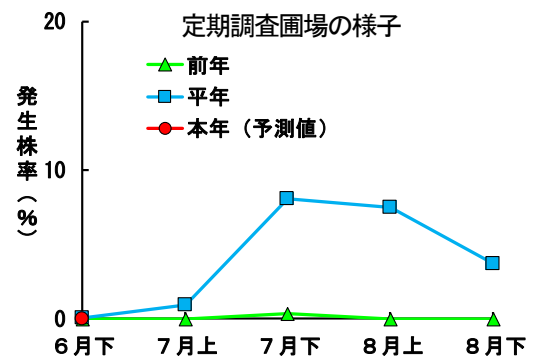


図1 山間早植え水稲での葉いもちの発生推移

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

## 2. イネミズゾウムシ

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査（図1 参照）

食害株率 1.3%（平年1.4%、前年0%） 平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

#### (2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

## 水稻（普通期）

### 1. 葉いもち

#### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

#### 2) 予報の根拠

##### (1) 前年の穂いもちの発生状況

平成29年の普通期水稻（10月上旬）の穂いもちの発生株率は、23.2%（平年14.3%）であり、平年よりやや多かった。（±～+）

##### (2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

(3) その他については、特記事項を参照する。

## 2. スクミリンゴガイ

#### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

#### 2) 予報の根拠

##### (1) 越冬状況

① 平成30年4月に調査した県内3地点の用排水路における平均越冬生貝率は32.1%と平年（41.3%）並であった。（±）

② 水田内での越冬生貝率は、平成29年12月～平成30年2月の平均気温が5.37℃と平年（6.56℃）より低かったことから、平年より低いと推定される。（図1. 過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。）（-～±）

##### (2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 用排水路・クレークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。

(2)その他については、特記事項を参照する。

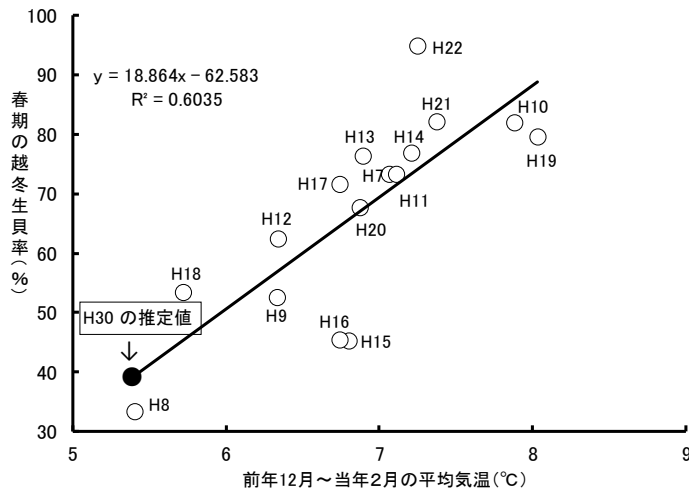


図1 冬期(12～2月)の平均気温と水田内でのスクミリンゴガイの越冬生員率(4月)との関係  
 ○: H7～H22の実測値(佐賀市の気温、川副町の同一水田における越冬生員率)  
 ●: H29年12月～H30年2月の気温を用いて上記の関係式から推定したH30年春期の越冬生員率

## 水稻 (全般)

### 1. 縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない (前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(早期水稻)

発生株率 0% (平年0%、前年0%) 平年比：並(±) 前年比：並(±)

② 小麦における20回すくい取り (第1、2表参照)

ヒメトビウンカ第1世代幼虫数14.0頭 (平年20.5頭、前年14.4頭)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

③ 小麦から採集したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒状況 (第1～3表参照)

保毒虫率 0.3% (平年1.1%、前年1.1%)

平年比：やや少(一～±) 前年比：やや少(一～±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、ヒメトビウンカを対象とした薬剤防除を行う。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生とイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況 (平成30年)

調査地点	小麦圃場でのヒメトビウンカの発生	ウイルス保毒状況	
	20回すくいとり虫数 (2圃場平均 ; 5月22日)	検定虫数	保毒虫数
	頭	頭	頭
佐賀市1	2.0	4	0
佐賀市2	11.5	29	0
鳥栖市	3.5	13	1
神埼市	32.0	50	0
小城市1	6.0	17	0
小城市2	4.5	10	0
多久市	39.5	50	0
武雄市	11.5	40	0
鹿島市	17.5	50	0
吉野ヶ里町	9.5	45	0
白石町	17.0	50	0
平均	<b>14.0</b>	県内平均保毒虫率 1/358*100= <b>0.3%</b>	



第2表 小麦（黄熟期～成熟期）でのヒメトビウンカの発生状況（20回すくい取り幼虫数）

	平成20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	平成
虫数	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭
(県平均)	8.7	22.9	13.0	11.7	2.7	9.0	28.4	26.0	68.0	14.4	<b>14.0</b>	20.5

注) 5月中～下旬に、県内11～14地点の各2圃場ずつ調査を実施(平成30年の詳細は第1表参照)

第3表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

	平成20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	平成
保毒虫率	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(県平均)	0.9	1.6	1.3	4.2	0.9	1.0	0.0	0.3	0.0	1.1	<b>0.3</b>	1.1

注) 5月中～下旬にヒメトビウンカを小麦圃場から採集して検定を実施(平成30年の詳細は第1表参照)

## イチゴ（育苗圃）

定期調査：10圃場  
調査日：5月22～24日



定期調査圃場の様子

### 1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：2.4%（平年1.9%、前年8.0%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多くやや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

(2) その他については特記事項を参照。

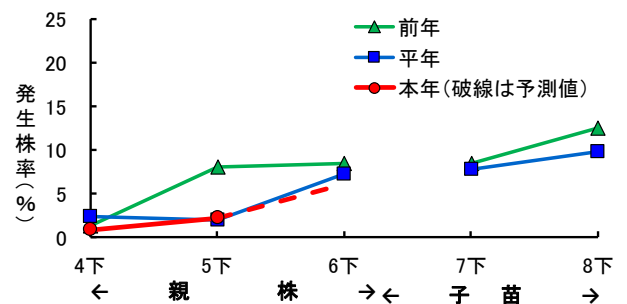


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

### 2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：22.8%（平年19.5%、前年10.0%）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

(2) 6月の気象予報

降水量が平年よりやや多くやや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を実施する。

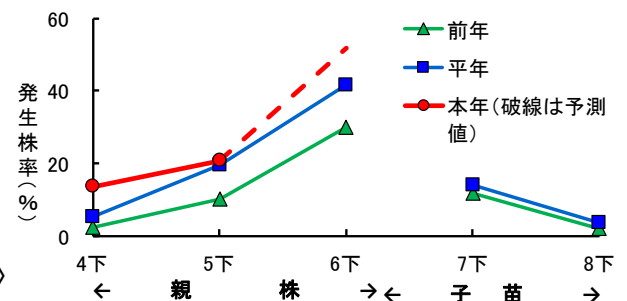


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

### 3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

## 2) 予報の根拠

### (1) 親株での発生の現況

#### ① 定期調査 (図1参照)

発生株率: 0% (平年0%、前年0%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

### (2) 6月の気象予報

降水量が平年よりやや多くやや多発生の条件(±~+)

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨が多い梅雨期は、病原菌の飛散・感染に好適な時期であるため、防除を徹底する。

(2) その他については特記事項を参照。

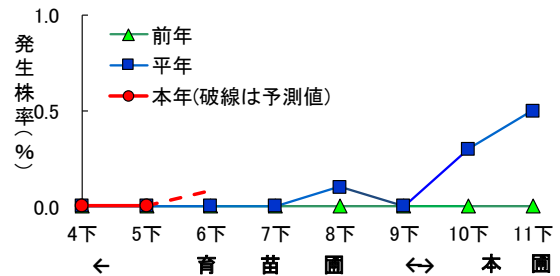


図1 イチゴ立枯症の発生推移

# アスパラガス

定期調査: 8 圃場

調査日: 5月22日~24日



定期調査圃場の様子

## 1. 茎枯病

### 1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査 (図1参照)

発生株率: 0% (平年0.2%、前年0.0%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

#### (2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件(±~+)

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

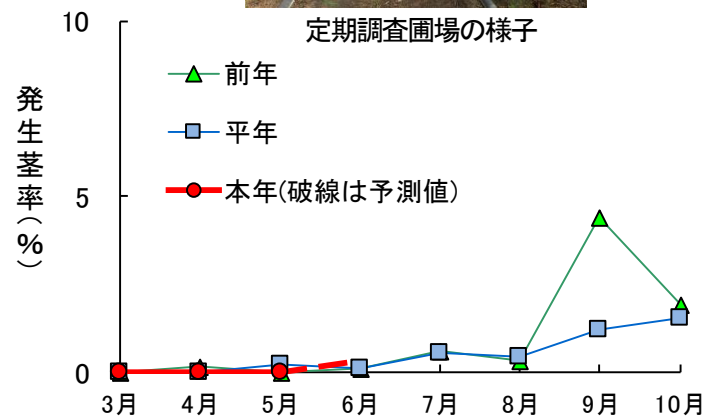


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

## 2. 褐斑病

### 1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査 (図1参照)

発生株率: 0% (平年0.1%、前年0.0%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

#### (2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件(±~+)

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

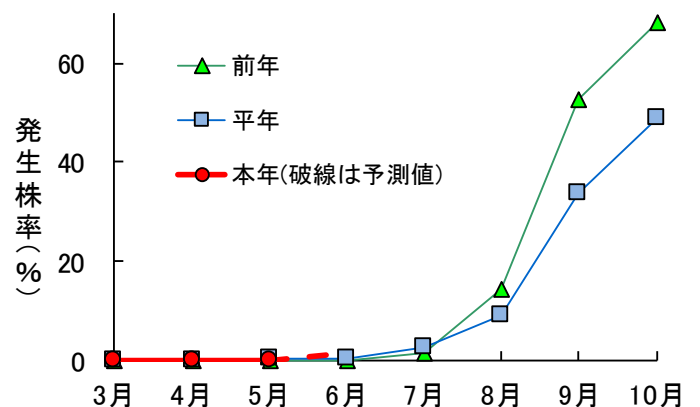


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

## 3. 斑点病

### 1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

### 2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 0% (平年 0.8%、前年 0.0%)

平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

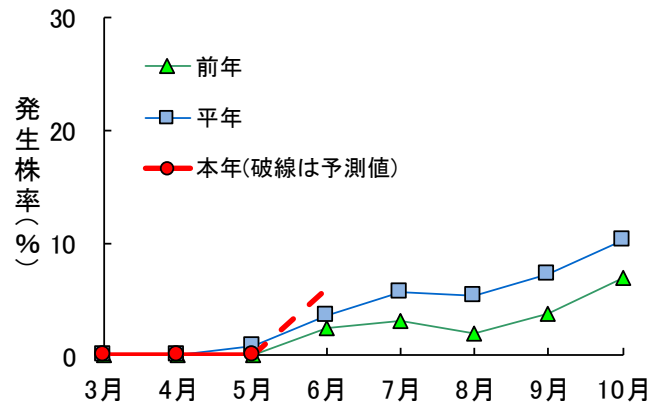


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

## 4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 41.3% (平年 26.1%、前年 49.3%)

平年比: やや多 (±~+) 前年比: やや少 (−~±)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

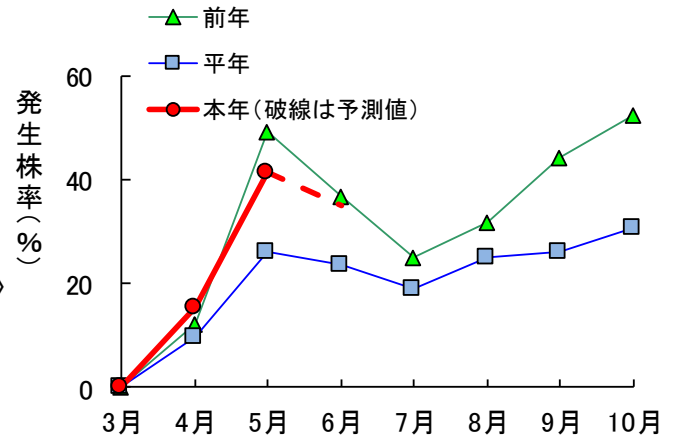


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

## 果樹全般

### 1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査 (詳細は、平成 30 年 3 月 12 日付け病害虫対策資料第 16 号参照)

① 越冬地点率: 68.2% (平年 37.7%、前年 18.2%)

平年比: 多 (+) 前年比: 多 (+)

② 平均越冬虫数: 0.67 頭/m<sup>2</sup> (平年 0.23 頭/m<sup>2</sup>、前年 0.14 頭/m<sup>2</sup>)

平年比: 多 (+) 前年比: 多 (+)

(2) 発生の現況

① 予察灯 (図1 参照)

平年比: 多 (+) 前年比: 多 (+)

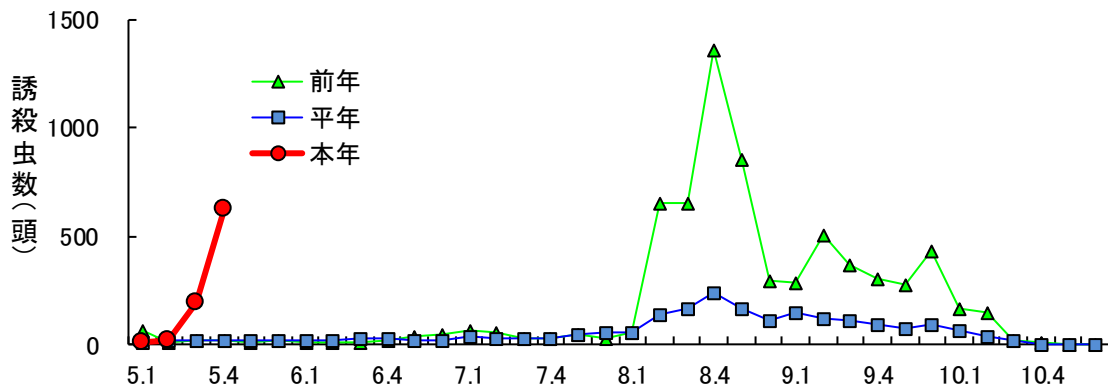


図1 予察灯 (佐賀市、小城市、太良町) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：多<+> 前年比：多<+>

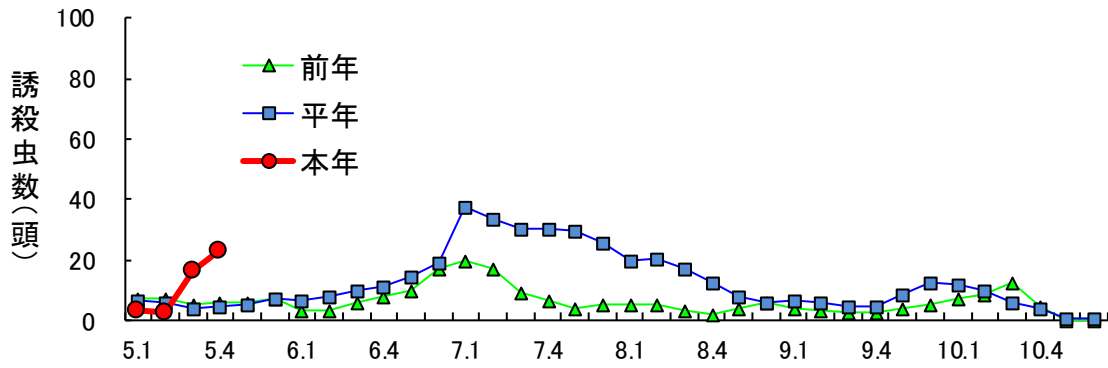


図2 フェロモントラップ (小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

カンキツ

定期調査：8圃場

調査日：5月22～25日

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年0%、前年0%)

平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。ただし、1回目の散布から200mm以上の降雨があれば薬害を生じにくいいため、近接散布が可能である。

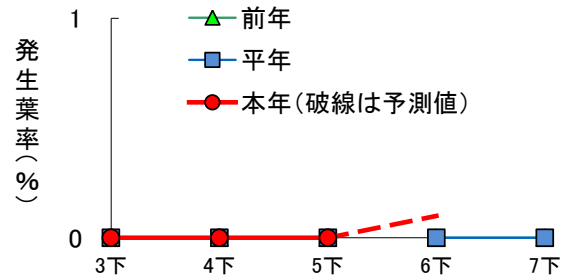


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年0.3%、前年0%)

平年比：やや少<~±> 前年比：並<±>

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種 (ネーブル、はるみ等) の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) では、無機銅剤水和剤 (クレフノン 200 倍加用) で定

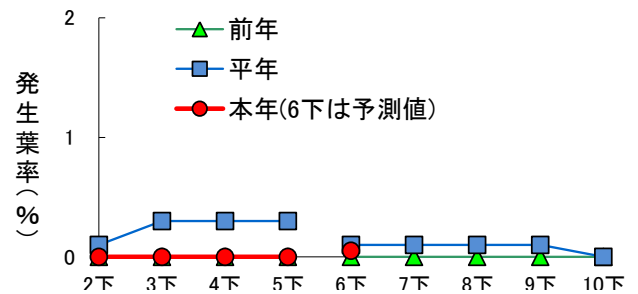


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

期的に防除を行う。散布間隔の目安は20～25日とする。

- (2) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

### 3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 前年の発生状況（図1）

平年よりやや少ない発生量で推移したため、圃場内の菌密度は平年よりやや少ないと考えられる（-～±）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実に感染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。

(2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200～250mm（マシン油乳剤加用の場合は300～400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。

(3) 枯れ枝は伝染源となるため除去し、処分する。

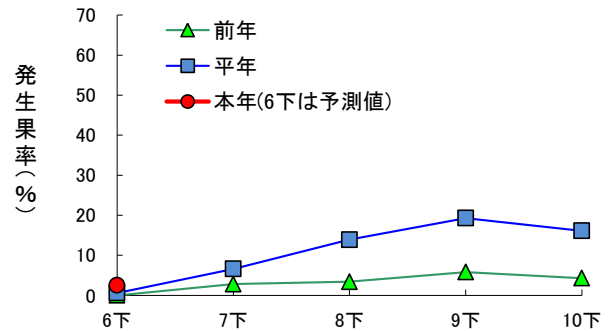


図1 カンキツ黒点病の発生推移

### 4. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生花弁率：8.3%（平年2.5%、前年0.3%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 残った花弁は発生源となるため、樹や枝をゆすって人為的に落とす。

(2) その他については、特記事項を参照する。

### 5. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：1.4%（平年4.4%、前年9.8%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや少発生の条件（-～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭）に防除を行う。

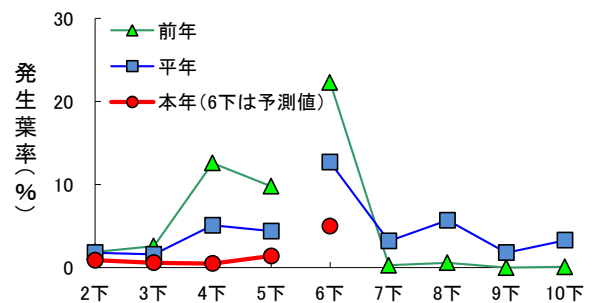


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照とする。

## 6. チャノキイロアザミウマ

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ①黄色粘着トラップ（図1参照）

平年比：やや少（一～±） 前年比：少（一）

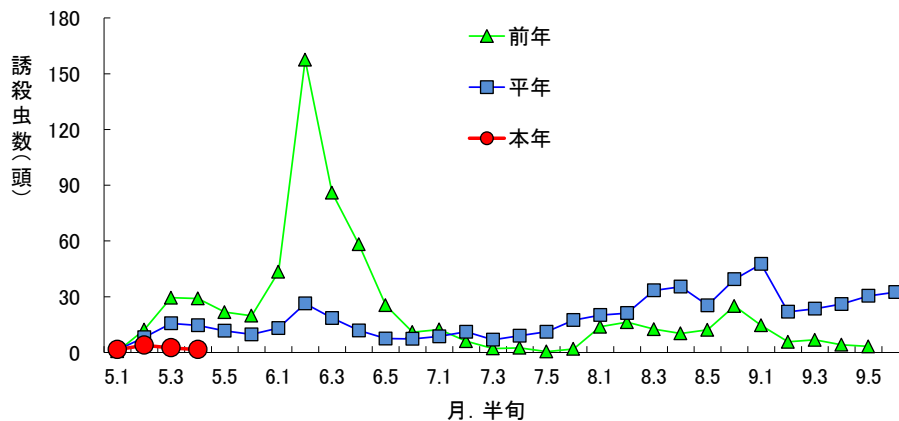


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（果樹試験場調査）

### (2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや少発生の条件（一～±）

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年、第2世代成虫の発生ピークが6月上旬頃である。被害を防止するため、6月上中旬頃に薬剤防除を実施する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

ナシ

定期調査（6圃場）  
調査日：5月23日



定期調査圃場の様子

## 1. 黒星病

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ①定期調査（図1、2参照）

発生葉率：1.0%（平年1.0%、前年0.8%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年1.4%、前年1.3%）

平年比：やや少（一～±） 前年比：やや少（一～±）

#### (2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

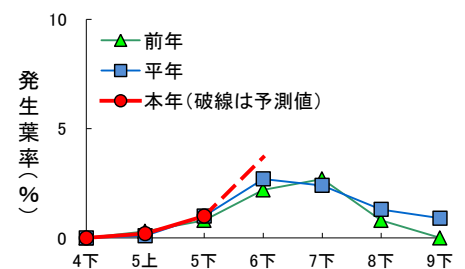


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移



3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- (2) 曇雨天が続くと発生が多くなるので、天候を見ながら適切に防除する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

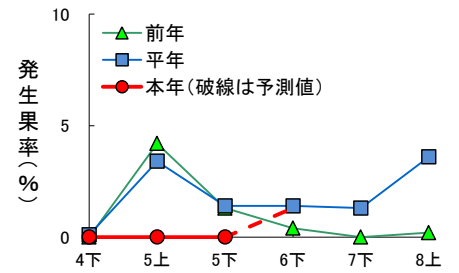


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

## 2. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①フェロモントラップ（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

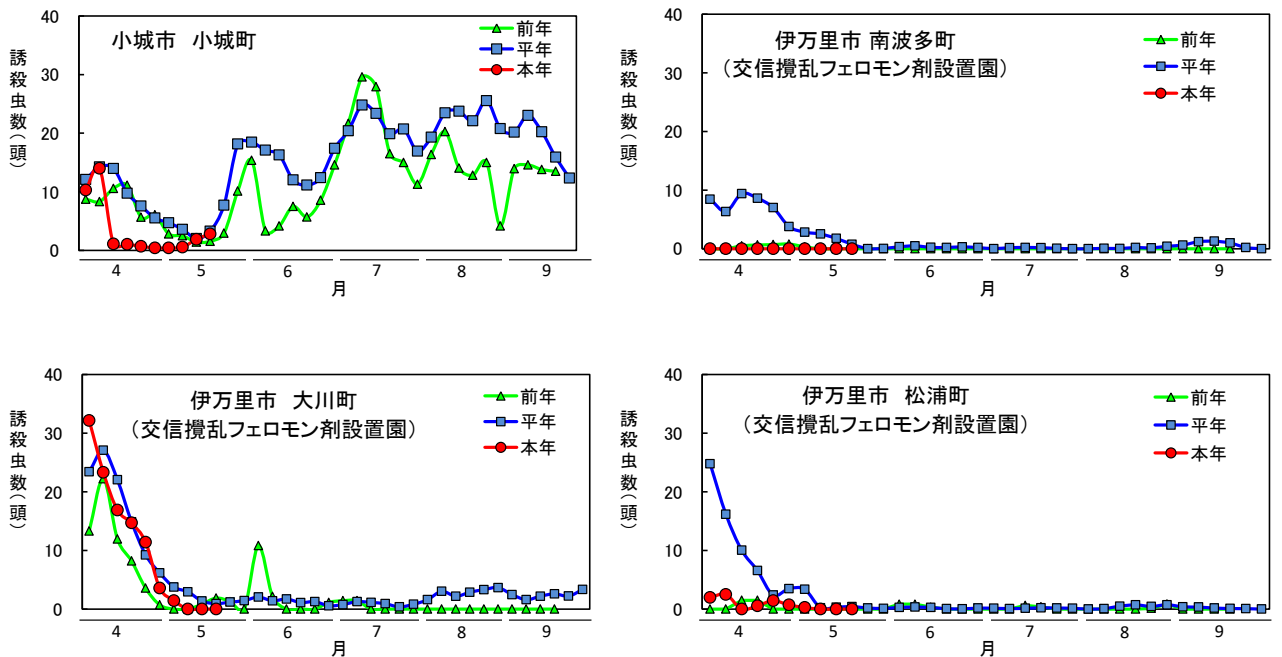


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移  
（果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査）

②サクラに設置したフェロモントラップ（表1参照）

サクラに設置しているフェロモントラップ（伊万里市3ヶ所）での、4月第1半句から5月第4半句までの誘殺数は前年よりやや多い（±～+）。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺数（頭）  
（西松浦農業改良普及センター調査）※4月～5月4半句の合計値

地点名	H27年	H28年	H29年	H30年
伊万里市 南波多町	15	18	30	38
伊万里市 大川町	30	31	32	10
伊万里市 新天町	37	32	14	78
計	82	81	76	126

(2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 交信攪乱フェロモン剤の設置を予定している園では、6月上旬までに設置する。

# ブドウ

定期調査 (6 圃場)  
調査日 : 5 月 22~24 日



定期調査圃場の様子

## 1. 黒とう病

- 1) 予報の内容  
発生量 : 平年よりやや多い (前年よりやや多い)
- 2) 予報の根拠
  - (1) 発生の現況
    - ① 定期調査 (図 1 参照)  
発生葉率 : 0.2% (平年 0.1%、前年 0%)  
平年比 : 並 (±) 前年比 : やや多 (±~+)
    - ② 6 月の気象予報  
降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)
  - (2) 防除上注意すべき事項
    - (1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

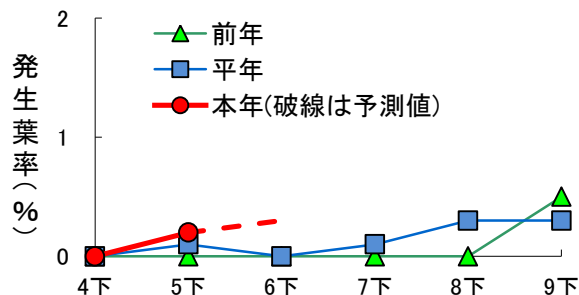


図 1 ブドウ黒とう病の発生推移

## 2. ベと病

- 1) 予報の内容  
発生量 : 平年より多い (前年より多い)
- 2) 予報の根拠
  - (1) 発生の現況
    - ① 定期調査 (図 1 参照)  
発生葉率 : 0.3% (平年 0.0%、前年 0%)  
平年比 : 多 (+) 前年比 : 多 (+)
    - ② 6 月の気象予報  
降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)
  - (2) 防除上注意すべき事項
    - (1) ブドウベと病では、ストロビルリン系殺菌剤 (アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等) に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。
    - (2) その他については、特記事項を参照。

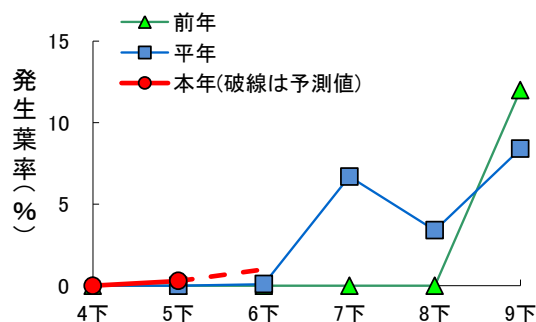


図 1 ブドウベと病の発生推移

## 3. 褐斑病

- 1) 予報の内容  
発生量 : 平年よりやや多い (前年よりやや多い)
- 2) 予報の根拠
  - (1) 発生の現況
    - ① 定期調査 (図 1 参照)  
発生葉率 : 0% (平年 0%、前年 0%)  
平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)
    - ② 6 月の気象予報  
降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)
  - (2) 防除上注意すべき事項
    - (1) 降雨により感染が進展するため、降雨前に薬剤散布を行う。
    - (2) 本病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬剤散布は葉裏にもかかるよう丁寧に行う。

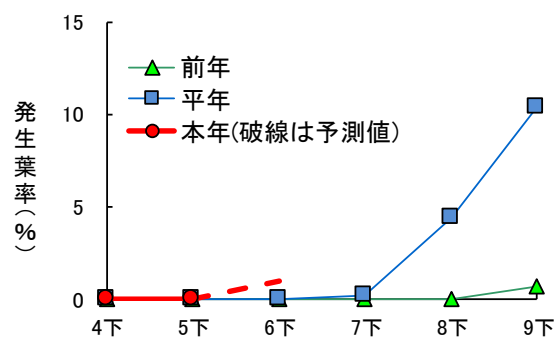


図 1 ブドウベと病の発生推移

## 4. チャノキイロアザミウマ

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の実況

①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図1）参照）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

#### (2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや少発生条件（-～±）

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 6月中旬～7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。

(2) 袋内への侵入を防止するために、袋の締め口をしっかりと締める。

茶

定期調査：7圃場

調査日：5月22～24日



定期調査圃場の様子

## 1. チャノキイロアザミウマ（本文掲載）

### 1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：19.9頭（平年8.1頭、前年5.9頭）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

②吸引粘着トラップ（図2参照）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

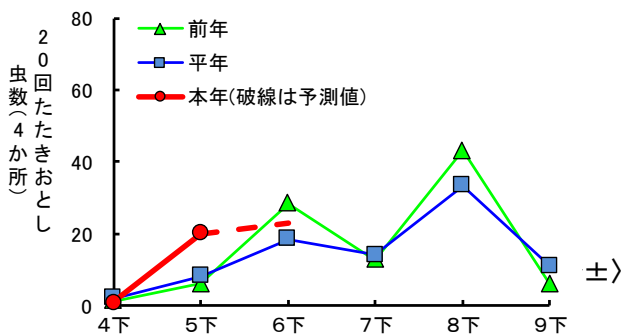


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

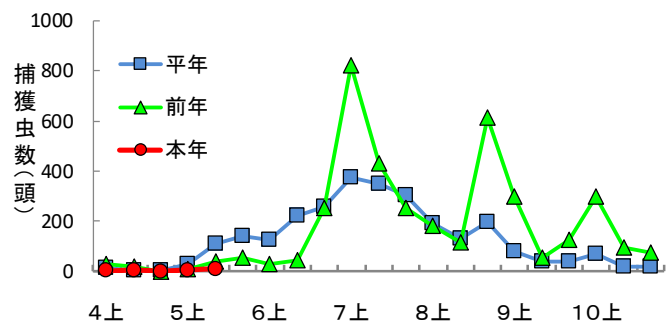


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(1) 二番茶萌芽～二番茶の開葉初期に防除を実施する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) その他は特記事項を参照

## 2. チャノミドリヒメヨコバイ

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

### 2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

20回たたきおとし虫数: 0.4頭

(平年3.0頭、前年1.1頭)

平年比: 少<- 前年比: 並<±)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件<±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶萌芽~二番茶の開葉初期に防除を実施する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

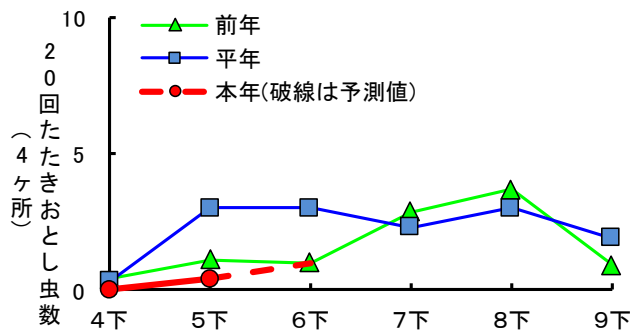


図1 チャノドリヒメヨコバイの茶での発生推移

### 3. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

被害葉数: 0枚/m<sup>2</sup> (平年0.0枚、前年0枚)

平年比: 並<±) 前年比: 並<±)

②フェロモントラップ (図2参照)

平年比: やや多<±~+) 前年比: やや多<±~+)

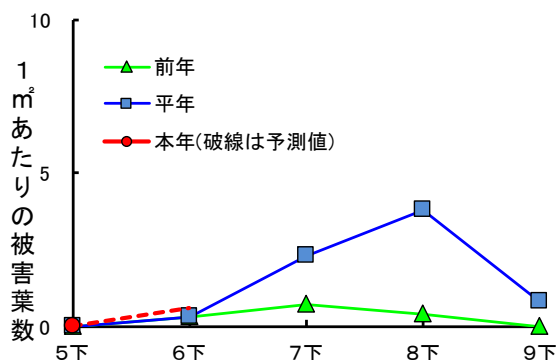


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の発生推移

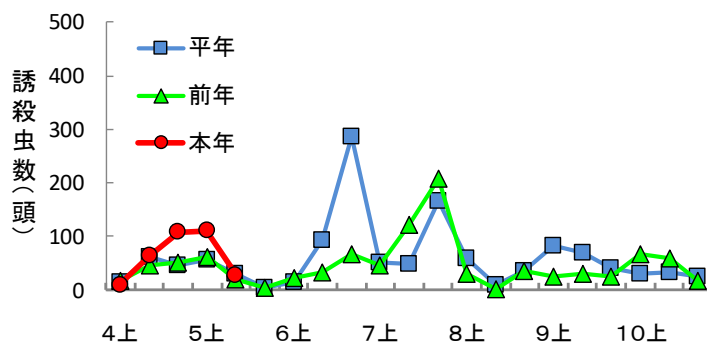


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移 (嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件<±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発蛾最盛期から1週間後頃が適期となるので、この時期に確実に防除を実施する。ただし、二番茶摘採園では、摘採前日数に注意し、新葉展開期に防除を実施する。

### 4. チャノホソガ (本文掲載)

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

被害葉数: 0枚/m<sup>2</sup> (平年1.7枚、前年0.1枚)

平年比: やや少<-~±) 前年比: 並<±)

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

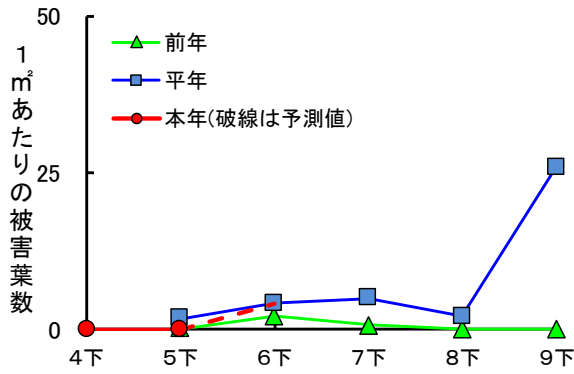


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

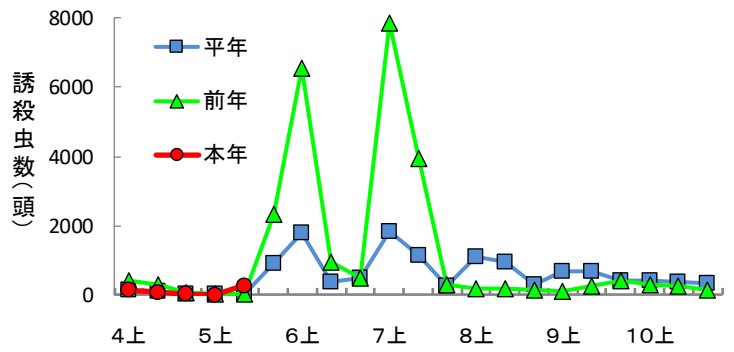


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 6月の気象予報

並発生条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発蛾最盛期から1週間後頃が適期となるのでこの時期に確実に防除を実施する。ただし、二番茶摘採園では、摘採前日数に注意し、新葉展開期に防除を実施する。

## 5. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照、H30より5月調査追加）

発生葉数：0枚/m<sup>2</sup>

(2) 6月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 新芽開葉初期が防除適期となるので、この時期に薬剤散布を実施する。二番茶摘採後に枝条更新を行わない園では、確実に防除を行う。

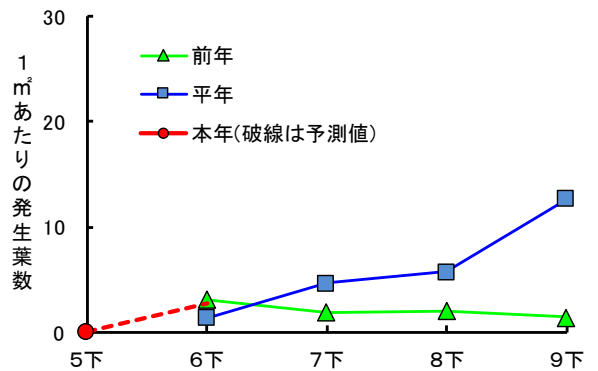


図1 炭疽病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部  
 〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088  
 TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085  
 Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp